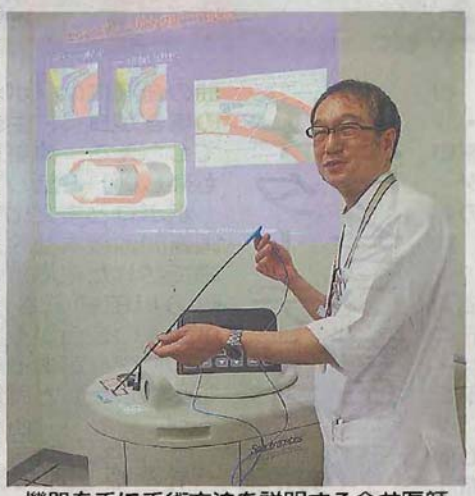
レーザー手術を開始

呉医療センター　切開少なく負担減

ペースメーカー導線除去

呉市の国立病院機構呉医療センター・中国がんセンターは、不調になったペースメーカーなどのリード線を心臓から取り除く新方式の手術を始めた。切開部分が少なく患者の負担を減らせるという。県内ではことし4月から、この手術ができる医療機関がない状態だった。（見田崇志）



機器を手に手術方法を説明する今井医師

ペースメーカーや植え込み型除細動器は、リード線を心臓に入れ、電気刺激で脈拍を補正する。リード線の不調や感染症が起これば取り除く必要がある。リード線は周囲に癒着しやすいため、開胸手術が主流だった。

一方、新方式は胸を5センチ程度切開してチューブを挿入。先端からレーザーを照射して癒着部分を剥がせる。呉医療センターは11月16日に60代男性を新方式で手術。男性は12月上旬に退院した。

新方式は難易度が高く、訓練を受けた医師が2人以上常勤するなどの要件を満たす医療施設は全国で50カ所に限られる。県内では、今井克彦医師がことし4月、広島大病院（広島市南区）から呉医療センターに移り、心臓センター部長に就任。新たな体制を整えた。今井医師は「中四国地方から患者を受け入れ、地域医療に貢献する」と話している。